

2025 年 10 月 4 日

岡部昌平

第 378 回山口西田読書会のプロトコル（2025 年 9 月 13 日開催／同 10 月 4 日配付）

【テキスト】

旧全集第四巻「知るもの」二の第 4 段落、335 頁 1 行目「一つの系列に従って類を特殊化して行く時」から 336 頁の 2 行目「一般的なるものを特殊化して行って、その尖端に於いて一般と特殊とが転換し得ると考へることができる。」までを読了

【キーセンテンス】

335 頁 13 行目

唯一なるものが限定せられると考える時、その根柢となる一般者の意味が変わって来なければならぬ。

【問い A】

あてはまる述語的一般性が見あたらない個物は自己自身にのみ同一で主語と述語（特殊と一般）が転換可能であることから、これが「変ずる」ときには一般者の意味が変わる（具体的一般者）ことが述べられているが、「特殊と一般」と「主語と述語」が不可分離的（330 ページ 4 行目）であるとは、この個物が変ずることによるものか。

【問い B】

種を成すことを拒む個物は具体的一般者に於いてあるよりほかないとされるが、何とも同一でない個物であってもなお「それ以外のもの」に於いてあり、むしろ「拒む」のではなくそれ以外のすべてに同一であると言えないか。「A は A であると同時に A でない」という転換ではなく「A は A であると同時に全体でもある」ということになる。